メッセージアウトライン
サムエル記第二6：1～23
「 神の箱 」

[1-2]「ダビデは再びイスラエルの精鋭三万をことごとく集めた。ダビデはユダのバアラから神の箱を運び上げようとして、自分とともにいたすべての兵と一緒に出かけた。神の箱は、ケルビムの上に座しておられる万軍の主の名でその名を呼ばれている」

ダビデは主なる神により頼んで、彼を狙って攻め上って来たペリシテ人の大軍を二度も打ち破った。→5:17~25

彼がここで三万人の精鋭を集めたのは、また戦いに出て行くためではなく、ペリシテ人への戦勝祝いを兼ねた凱旋行列であったであろう。そしてそれに合わせて、ダビデはユダのバアラからエルサレムへ神の箱を運び上げ、安置しようとしたのである。バアラとは主の箱が長い間とどまっていたキルヤテ・エアリムのことである。→Ⅰサム7:1~2，Ⅰ歴代13:6 ここはエルサレムの北西約10キロメートルの地。神の箱はその地に二十年間とどまっていた。

主なる神の臨在を表す「神の箱」の中には、マナの入った金の壺、芽を出したアロンの杖、十戒の記された契約の板が入っていた。→ヘブル9:4 これは出エジプトの時代、主なる神が幕屋（後の神殿）の至聖所に安置すべくモーセに命じて他の備品とともに作らせたものである。→出25章

神の箱は一時ペリシテ人との戦いで奪われていたが、ペリシテ人はそれゆえに受けた多くの災いを恐れて、イスラエルの地に戻し、それがキルヤテ・エアリムに安置されていたのである。

[3-4]「彼らは、神の箱を新しい荷車に乗せて、それを丘の上にあるアビナダブの家から移した。アビナダブの子、ウザとアフヨがその新しい荷車を御した。それを、丘の上にあるアビナダブの家から神の箱とともに移したとき、アフヨは箱の前を歩いていた」

この荷車は牛に曳かせたものであった。

[5]「ダビデとイスラエルの全家は、竪琴、琴、タンバリン、カスタネット、シンバルを鳴らし、主の前で、すべての杉の木の枝をもって、喜び踊った」

あらゆる楽器と踊りで喜びつつ、エルサレムに向かってダビデの一行が進んで行く様子が目に見えるようである。「杉の木の枝」はそれを踊りながら打ち振ったのであろう。

[6-7]「彼らがナコンの打ち場まで来たとき、ウザは神の箱に手を伸ばして、それをつかんだ。牛がよろめいたからである。すると、主の怒りがウザに向かって燃え上がり、神はその過ちのために、彼をその場で打たれた。彼はそこで、神の箱の傍らで

死んだ」
「ナコンの打ち場」…麦などの穀物を脱穀する場所。場所不明。ここで牛がどうしたわけか、よろめき、曳いていた荷車の上に乗せてあった神の箱が落ちそうになり、それをウザが支えようとしてつかんだ。神の箱を素手で触ったのである。神はこれに怒りを発せられ、ウザをその場で打たれ、彼は神の箱の傍らで死んだ。
なぜこのような出来事が起こったのか。それはこの神の箱の運び方に問題があった。

① 律法によればまず祭司が神の箱におおいをかけ、箱の四隅についている金の輪に、金でおおった担ぎ棒を通してから、レビ人が肩に担いで運ばなければならなかった。→民数記3:29~31、4:5~6、15　今回はこのような決め事が一切なされておらず、牛車に載せて運ぼうとした。
② 神の臨在を表す聖なる神の箱を手で触った。罪ある、そして俗なる人間が聖なる神にそのまま近づくことはできなかった。そのために神に仕える祭司やレビ人が特別に立てられていたのに、この時は彼らがそのための奉仕をしていなかった。→民数記4:15
③ 主なる神はウザに怒りを発せられ、彼を打たれたので彼は死んだ。不敬罪である。
ウザは長年自分の家に安置されていた神の箱の存在に慣れて、単なる神の宮の備品くらい

に思い、神に対する恐れを欠いた、なれなれしさがあったのかもしれない。
それにしても、
あまりにも厳しすぎる神のさばきであると思われるが、神と人間は決定的に違うということを私たちは覚えておかなければならない。神は天地万物の創造主であり、聖なるお方であり、神の被造物である人間はアダム以来の罪の中にある罪深い俗なる存在である。神を単なる自分より目上の親しい友達のように思い、自分勝手な思い込みで神に近づくことはできない。モーセの兄であったアロンの二人の息子は聖所で神に異なった方法で香をささげたために主のもとから出た火で焼かれて死んでしまった。→レビ10:1~3
主は燃える柴の中からモーセを呼ばれたが、近づいて来る彼に向かって「ここに近づいてはならない。あなたの履き物を脱げ、あなたの立っている場所は聖なる地である」とご自分が聖であることを示された。→出3:1~5　人は神を見て、なお生きていることはできない。→出33:20
[8]「ダビデの心は激した。主がウザに対して怒りを発せられたからである。その場所は今日までペレツ・ウザと呼ばれている」
　今まで主により頼み、主に導かれ、主の守りのうちに、主とともに歩んできたダビデは、ここで人間とは全く違う主の聖さ、怒り、恐るべきさばきを見て恐れ、困惑し、

その心は激したのである。
「ペレツ・ウザ」…ウザの割り込みという意味。
[9-10]「その日、ダビデは主を恐れて言った。『どうして、主の箱を私のところにお迎えできるだろうか。』ダビデは主の箱を自分のところ、ダビデの町に移したくなかった。そこでダビデは、ガテ人オベデ・エドムの家にそれを回した」
　ダビデは自分が罪深い俗なる人間であることを自覚し、とてもこの主の箱を自分の町に迎えることはできないと恐れ、ガテ人オベデ・エドムの家にそれを回したのである。
「ガテ人オベデ・エドム」…ペリシテのガテ出身の寄留者であったのかもしれない。彼の家はナコンの打ち場に近かったのであろう。
[11]「主の箱はガテ人オベデ・エドムの家に三か月とどまった。主はオベデ・エドムと彼の全家を祝福された」
　オベデ・エドムは恐れつつもこの主の箱を迎え、自分の家の最善の場所に安置し、主に仕え、主を礼拝しつつ、毎日を過ごしたのであろう。もちろん手で触るというようなことはしない。そのようなオベデ・エドムの家を主は祝福されたのであった。
[12-13]「『主が神の箱のことで、オベデ・エドムの家と彼に属するすべてのものを祝福された』という知らせがダビデ王にあった。ダビデは行って、喜びをもって神の箱をオベデ・エドムの家からダビデの町へ運び上げた。主の箱を担ぐ者たちが六歩進んだとき、ダビデは、肥えた牛をいけにえとして献げた」
　「神の箱」のゆえにオベデ・エドムの家が祝福されているとの知らせを聞いたダビデは、再び神の箱をダビデの町へ運び上げようとした。今度は牛車ではなく律法の教えに従って、レビ人たちがその肩で主の箱を担いでいた。「主の箱を担ぐ者たちが六歩進んだとき」とは運搬作業が無事に進みそうなのを確認したときという意味であろう。このとき、ダビデは肥えた牛を主にいけにえとしてささげたのである。
[14-15]「ダビデは、主の前で力の限り跳ね回った。ダビデは亜麻布のエポデをまとっていた。ダビデとイスラエルの全家は、歓声をあげ、角笛を鳴らして、主の箱を運び上げた」
　ついに主の箱を自分の町に迎え入れることができる。ダビデはそのうれしさのゆえに、主の前に力の限り跳ね回った。彼は子どものように躍り上がり跳ね回ってそのうれしさを表し、全会衆も同様に歓声をあげ、角笛を鳴らしつつ主の箱をエルサレムに運び上げた。エルサレムは丘の上にあるので、文字通り運び上げたのである。エポデは祭司やレビ人が着る服であるが、ダビデはここで祭司の仕事の一部を自ら担ったようである。→17~18節
[16]「主の箱がダビデの町に入ろうとしていたとき、サウルの娘ミカルは窓から見下ろしていた。彼女はダビデ王が主の前で跳ねたり踊ったりしているのを見て、心の中で彼を蔑んだ」

ミカルはダビデのように主の箱のエルサレム搬入を喜ぶのではなく、その様子を窓から冷ややかに見下ろして、心の中で彼を蔑んだ。一国の王である者が威厳も落ち着きもかなぐり捨てて、なんたるふるまいかと思ったのであろう。
[17-19]「人々は主の箱を運び込んで、ダビデがそのために張った天幕の真ん中の定められた場所にそれを置いた。ダビデは主の前に、全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げた。ダビデは全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げ終えて、万軍の主の御名によって民を祝福した。そしてすべての民、イスラエルのすべての群衆に、男にも女にも、それぞれ、輪形パン一つ、なつめ椰子の菓子一つ、干しぶどうの菓子一つを分け与えた。民はみな、それぞれ自分の家に帰った」
「全焼のいけにえ」…いけにえの動物の血を祭壇の周りに注ぎ、献げた動物を全部焼いて何も残さず、主に献げる。これは献げる者の全き献身を表すものである。
「交わりのいけにえ」…感謝のしるしであり、いけにえの動物の一部を祭壇で焼き、一部は祭司に、一部は供えた者に分け与えられた。輪形パンはそれに添えて献げられる。→レビ7:12~21
他の菓子類はイスラエルの民全員に与えられる祝いの品であった。
[20]「ダビデが自分の家族を祝福しようと戻ると、サウルの娘ミカルがダビデを迎えに出て来て言った。『イスラエルの王は、今日、本当に威厳がございましたね。ごろつきが恥ずかしげもなく裸になるように、今日、あなたは自分の家来の女奴隷の目の前で裸になられて。』」
「…威厳がございましたね」…これはダビデに対する皮肉である。
「…恥ずかしげもなく裸になるように」…これは全裸ではなく、王衣を脱いで下着の上にエポデをまとった姿である。ダビデ王の妻ミカルにとって、羽目を外したように見えるそのような行為は卑しむべきものであった。
[21-23]「ダビデはミカルに言った。『あなたの父よりも、その全家よりも、むしろ私を選んで、主の民イスラエルの君主に任じられた主の前だ。私はその主の前で喜び踊るのだ。私はこれより、もっと卑しめられ、自分の目に卑しくなるだろう。しかし、あなたの言う、その女奴隷たちに敬われるのだ。』サウルの娘ミカルには、死ぬまで子がなかった」
ダビデはミカルの父サウルよりも、その全家よりも自分を選んでイスラエルの君主として下さった主の前で喜び踊るのは当然のことであり、そのようにして自分はもっと卑しくなり、ミカルの言う女奴隷たちに敬われるのだと答える。下着姿で祭服であるエポデをまとい、自分をイスラエルの君主として下さった主のために喜び踊るのが女奴隷たちに敬われることであるのなら、自分はもっとそのようにしようというのである。
ここでダビデがミカルと対立したことは、サウルに始まる武力を背景にした威圧的な王政ではなく、

主なる神を中心とする宗教的な王政、王国をめざしていることが分かる。彼は神を中心とするイスラエル王国を建設しようとしているのである。
サウルの娘ミカルには死ぬまで子どもが産まれなかったことが記されているが、それはサウル家の血がダビデ家に入らなかったことを意味する。ミカルは前王サウルの娘であり、ダビデはその娘婿であり、人間的に見ればミカルから生まれた子が王位継承権を持つはずであったが、彼女には死ぬまで子がなかったのである。それでサウル的な王ではなく、ダビデ的な信仰を持つ者が次の王として期待されるが、すでに多くの妻から多くの子が生まれていたゆえに、さまざまな問題を引き起こすことになる。
　今日の箇所で教えられることは、神は聖なるお方であり、人間は罪ある俗なる存在であり、この神に近づくためには神と人との間に立つ者が必要であり、それがダビデの時代には祭司、レビ人という神に仕え、罪の贖いのために、いけにえを献げ、そのために奉仕する人々であったが、今やダビデの子孫として世に来られたイエス・キリストこそがその十字架の死によって人間の罪を贖い、神と和解させ、神に近づく道を開き、救いを与えてくださる時代となっている。→エペソ2:1~9
このお方を救い主として信じる者は誰でも死と滅びより救われ、神のものとされるのである。
→ヨハネ3:16